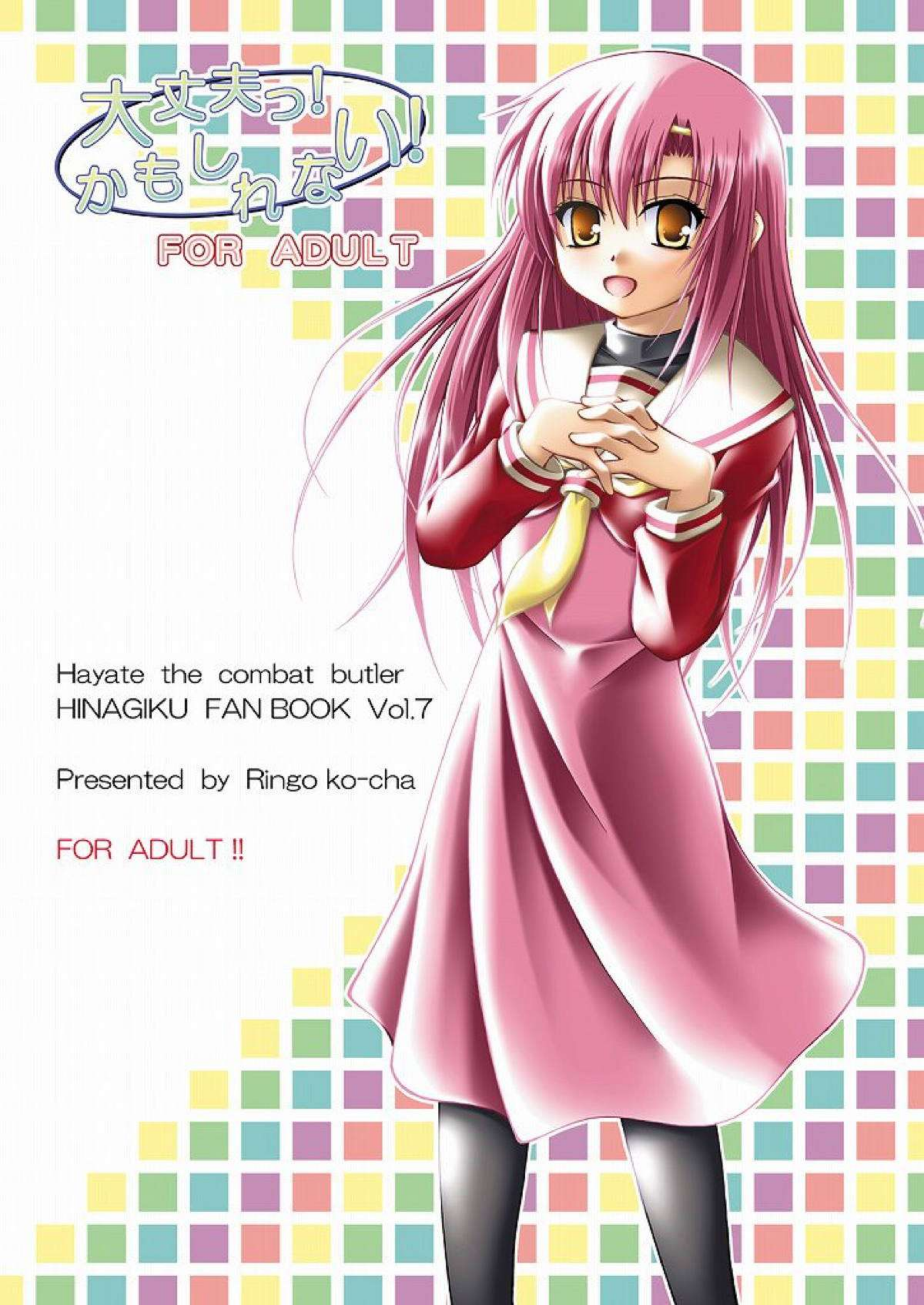

Hayate the combat butler
HINAGIKU FAN BOOK Vol.7

Presented by Ringo ko-cha

FOR ADULT !!

ハヤテの弱点って
ドコにある
のだろうな

な…
ナギちゃんには
まだ早い！

…あれ？
……

それは
CMのパロか
頭の中
どピンクか
どっちだ？

メカハヤテ2号だっ

今度のメカハヤテは見た目まで本物そっくりのスペシャル仕様だ

よろしくお願いします

私でも本物と見分けつきませんけど大丈夫ですかハヤテ君？

それでハヤテにお願いがあるのだが…

…って事でしばらく僕と一緒に行動して色々と覚えさせるらしいんですよ

…はぁ？

…で？

いやだなぁ僕ですよ

!?

どっちが本物のハヤテ君？

ん―…

まあ
ヒナギクさんなら
どっちが本物か
分かるでしょう？

!?

え…
えーっ…と

たじっ

あれ？
分からないん
ですか？

この目をしている時のハヤテ君は…
んーっと
どっちが本物の僕かすぐに分からせてあげますよ
仕方ないですねぇ…
なに言っているんですか
それはこっちの台詞ですよ
なぁっ

保健室

どうです？ヒナギクさん

どっちが本物の僕かわかりました？

ふ…っ

ぐっ

ずっ

ずっ

ずっ

ずっ

こすっ

んっ

ここまでしてあげてるのに分からないんですか？

僕とヒナギクさんの仲なのに

ヒドイじゃないですか

そ…そん…な

ぐいっ

ぐちゃっ

ぶるぶるっ

…ことわ…れ…ても…っ

今まで散々可愛がってあげてきたのにこんな事すら分からないなんて
ぐちゅっ
ぐちゅっ
ぐちゅっ
ずぷっ
ずずっ
くちゅっ
ダメですねヒナギクさん
ぐぐっ
ぶるっ
ぶるっ
ぶるっ
だ…っ
だって二人ともハヤテ君と同じなんだもん
ちゃっ
ちゃっ
ニぷっ

なにを言っているんですかちゃんと違いますよ

ぐぃっ

ぐぷっ

ふっ

ぢゅっ

ぶるぶる

ずずっ

ずぷっ

ぶるっ

ぐ…っ

このままだとちゃんと違いが分かるまで何回でも補習ですね

ぢゅぷっ

ぢゅっ

んんっ

ぢゅぷっ

ぢゅっ

ぢゅっ

ほらっ
どうですか
ヒナギクさん

ちゅぷっ
ちゅぷっ
くり
ぷっ

まだ何も
分からないん
ですか？

ぶる
ぶる

ぬぢゅぷっ
ぬぢゅぷっ
ぬぢゅぷっ

ふあっ

や……っ

ぬぢゅぷっ
ぬぢゅぷっ
ぬぢゅぷっ

仕方ないですね
ぢゅぷぷっ
ぢゃっ
これもしっかり確認させてあげますよ
んぐっ
ばっ!!
あ…っ
ぶるぶるっ
ずずっ
ずっ
ぬぷっ
ひあっ
ぬぷっ
ぬぷっ
それじゃあこっちもたっぷりと確認をさせてあげますよ
んん…っ

ふぁ…

ビュッ!!

びゅっ

ごぷっ

ぶるっ

ぶるっ

びくっ

な…っ

ぶるっ

なんで二人ともイけるのよ

ヒナギクさん三千院の技術を甘く見ましたね？

え…？

グイッ

グッ

射精出来た方が本物なんて甘い考えをしてるならもっといっぱい勉強しましょうね

やっ
ひあっ
ぐんっ
ちょ…っ
だ…っ
だめえっ!!
ふぐっ
ぬぷっ
ぬぷっ

ビクッ
ビクッ
ああっ
ぬぷっ
ぐぽっ
どぷっ
ぬぷっ
ぬぷっ
ずぽっ
どうです
ヒナギクさん
そろそろ違いが
分かって
きましたか？
だ…やっ♥めぇ
ぶる
ぶるっ
ひ♥あっ
ぬぷっ
ごぷっ
ごぷっ
ごぷっ
ごぷっ
ぶるっ
もぉ…ひりっ♥!!

あっ♥イ♥あっ

ぶぷっ!

ぶぴゅっ!!

ビクンビクン!!

ビクーン!

あああ♥あ♥!!

…って

コトになったりしていると思うんですけど

大丈夫だろ

ハヤテはまだしもヒナギクがそんなコトを許すはずがない！

意外とハヤテ君の事信用してないですね…

そっぱり！

でもヒナギクさん流されやすかったりしますし…多分〝ドM〟なんでハヤテ君に強引に押し切られると…

ふっふっふっ

その点ヌカリはないぞ

メカハヤテは毎日メモリーを回収して何があったかチェック済みだ

プライバシー無いですね…

メモリー再生中

そして死亡フラグ確定！

なぁ!?

終わった

ダーリン……かもしれないっ！

鷹宮　沙玖羅

気持ちよく晴れた初夏の空。
澄んだ空気を胸一杯に吸い込んだハヤテは、早朝の白皇学院のメインストリートを歩いていた。
隣に主人である三千院ナギの姿はない。
昨日、新作のゲームが発売されたばかりで、当然のごとく彼女は徹夜でゲームに没頭していたらしい。ただでさえ不登校ぎみであるのに、そんな状態の彼女が朝から元気に登校できるはずがなく、しかたなくハヤテは一人で登校したわけなのだが。
清々しいはずの朝の空気は、突然の衝撃を前に、彼の周りだけキレイに凍りついた。

「ハヤテくんお願い！　私と付き合ってくださいっ！」
「……ハイ？」
のんびり歩いていたハヤテは、突然後ろから伸びてきた腕に拉致されて、メインストリート脇の林の中に連れ込まれていた。
目の前には、全校生徒の憧れ、麗しの桂ヒナギク生徒会長の姿。その彼女は今、ハヤテの目の前で、頬を真っ赤に染めて彼を見つめていた。
その様子はいかにも『可憐』という形容がふさわしくて、男なら誰もが一発KOされてもおかしくないくらいの破壊力だ。
そんな彼女が……付き合ってください？
「……えっ？　……はあぁぁっ!?」
ようやく状況を理解したらしいハヤテは、遅ればせながら盛大に飛び退った。
だって、ありえない。こんなにかわいい娘が自分に告白、なんて。だって、告白ってことは、……ヒナギクがハヤテのこと

を、好き……ということになりはしないだろうか？
ヒナギクにつられて、ハヤテまでも赤面した。
なんだろう、このいかにも少女漫画な展開は!? たしかナギの本棚に、こんな感じの漫画があった気がする。
(うわー、僕も人並みにラブコメするとは思ってなかったなー)
もちろん、断るなんて選択肢は存在しない。
というか、断ったら負けだろう、男として！
ハヤテはばくばくする胸を押さえて、あくまでスマートに返答しようとした。
「僕でよかったら、喜ん……」
「あっ！ か、勘違いしないでよねっ！ 別にあなたのことが『好き』だってワケじゃないんだからっ！」
ハヤテ的に完璧なお返事を遮って、ヒナギクがまくしたてた。
気まずいのか、耳まで真っ赤に染めたまま、腕を組んでそっぽを向いている。
この態度は告白シーンでは、ちょっと珍しいような気がする。
ハヤテにとっても初めてのことだし、よくわからないが、最近はこんなのが流行っているのだろうか？ いわゆるツンデレ？
付き合ってほしいと言っておきながら、別に好きなわけじゃない？
経験不足なハヤテの頭の中には、ひたすら疑問符が浮かぶばかり。
とりあえず、ハヤテは固まりながら、
「……ハイ？」
と、気の抜けた返事をするしかできなかった。

「ああ、なるほど。つまりはカムフラージュなんですね」
衝撃の告白から十分後。
彼らは人目の付かない生徒会室に移動して、とりあえずお茶をしていた。
早めに登校していたために、始業までにはまだ余裕がある。
「そーゆーコト。ごめんなさいね、こんなこと頼めるのハヤテくんしか思いつかなくて」
「いえ、頼っていただけて光栄ですよ」
内心では落胆著しいのだが、そんなことはおくびにも出さない。そんなことだろうなー、とか、世の中そんなに甘くないなー、とか思いながら、無理やり納得しようとしているところが滑稽だが。
「それにしても大変でしたね。モテすぎるというのも問題だ」
「ちょっと、笑い事じゃないんだけど」
乾いた笑いをするハヤテを、ヒナギクは軽く睨んだ。
もちろんハヤテにだってわかっている。ただ軽く現実逃避したかっただけだ。
「で、僕はどうすればいいんですか？ つまりはそのストーカーくんを諦めさせればいいんでしょう？」
ヒナギクの話では、以前に彼女に告白した男がしつこくて困るということだった。当然彼女はきっぱりと断ったのだが、その彼は諦めきれないらしくて、半ストーカーと化しているしだいだ。始めはわざわざ何度もお断りしていたヒナギクだったが、あまりに聞く耳を持たないので、実力行使に出た……というわけだった。
「そ……うなのよ。だからとりあえず、付き合っているフリをしてもらえないかしら？ 私に彼氏がいるって納得したら、さすがに諦めてくれるでしょう？」

それはどうかなー、とハヤテは内心思う。タチが悪いのは、相手に彼氏がいようが関係ナシの気がする。
でも、まぁ、それでヒナギクが納得するのなら、ハヤテにだって異論はない。
最悪、そのストーカーくんが思い余ってヒナギクに迫るようなことがあっても、ハヤテならば撃退する自信がある。
そばで守ることのほうがメインになりそうだとハヤテは思った。

その日の昼休み。
「ヒナギクさん、お昼は屋上でご一緒しませんか？」
ハヤテは弁当を片手に授業終了間もないヒナギクの教室に現れた。
「あ、うん、すぐ準備するから待っててて」
突然登場した少年の誘いに二つ返事で了承したヒナギクに、教室内がどよめき立った。
無理もない。今まであの完璧な容姿を誇る生徒会長は、その外見とは裏腹に、周りに男の影などありはしなかったのだから。
そんな彼女が貴重な昼休みにわざわざ弁当を持って男と消える、なんてことは天変地異の前触れとしか思えない。
好奇の眼差しを向ける者、密かに涙を呑む者、様々な人間模様が一瞬にして繰り広げられて、教室内は騒然としていた。
そんな中、勇気ある人物がツッコミを入れる。
「ちょっ……なによ、そのラブコメみたいな会話は！」
「どうして綾崎が桂さんを迎えに来るんだ!?」
「ねぇヒナ！　あなたもしかしてハヤテくんと付き合ってるの!?」
一斉に好奇もろもろの視線を向けられて、ヒナギクはたじろいだ。どうしてみんなそんなに気にしているんだろうか、と首を傾げる。この期に及んで、自分がいかに人気があるかをいまいち自覚していないヒナギクだ。
とりあえず、カムフラージュがバレないように是と答えると、彼女はどよめきが爆発する教室から、弁当片手に逃げ出して来た。
「お、おまたせ……」
「お疲れ様です」
ハヤテはヒナギクの弁当をさりげなく受け取ると、屋上に向けて歩き出す。
とりあえずは仲睦まじく。学生らしく過度にベタベタすることなく、けれど親密な会話で。さりげなく手を繋いでいたりする。
少し歩いたところで、彼はこっそりと口端を上げた。
さっきから絶妙の距離を保って、気配がひとつついて来ている。それが例のストーカーくんであることは、ヒナギクに向けられる視線の熱さから窺い知れた。
その気配に、ハヤテはとりあえず気付かないフリをして屋上に向かった。
「さぁヒナギクさん、どうぞ」
屋上へ通じる重い扉を押さえながら、ハヤテがヒナギクを招く。
「……あ、ありがとう……」
彼女はとっても気が進まない様子で躊躇ったあと、なんとか屋上に足を踏み入れた。
「……うっ」

無情にも彼女の背後で扉の閉まる音がした。
さっきまではラブコメシチュエーションを維持するのに必死でよく考えていなかったけれど、屋上といえば相当の高さだ。
高所恐怖症の彼女にとっては、とんでもなくハードルが高い。
絶対に階下は見まいと心に決めて、彼女はできるだけ扉の近くに座った。
「とりあえず、今は大丈夫ですよ。屋上の扉は完全防音になってますから、僕たちの会話は扉の向こうには聞こえないはずです」
「そ……う」
ヒナギクは少しだけほっとして、弁当の包みを解いた。
隣にハヤテが座る。
「それで、やっぱりつけて来てた？」
「ええ、そりゃあもう、熱い視線を送ってきていましたよ。ヒナギクさん、かわいいから」
ヒナギクの顔が一瞬で茹でダコになる。
「な、な、なによ、かわいいって！　もう、だから笑いごとじゃないんだってば！」
「わかってますって」
にこにこ笑いながら、ハヤテは照れるヒナギクを眺めていた。
これは思った以上に役得だったのかもしれない。こんなにかわいいヒナギクを独占できるのだから。ヒナギクには悪いが、ストーカーくんに感謝したいくらいだ。
「……なによ？」
ハヤテの視線に気づいた彼女が、まだ耳まで火照らせながら軽く睨んでくる。
そんな姿すら愛らしくて、ハヤテはよしよしと撫でてやりたい衝動を我慢して、自分の弁当を取り出した。

「いいえ、なんでも。……ただ、今回のストーカーくんのことに限らず、何か困ったことがあればまず僕に相談してくださいね。力になりますから。ヒナギクさんは頑張り屋さんだから、ひとりで何でもしてしまいますけど、できればもっと僕に頼ってくださいね」
ハヤテが微笑めば、ヒナギクはさらに頬を染めて俯いた。
「……ん、……ありがと」
そして、つかの間の穏やかな時間は過ぎていく。
ハヤテはヒナギクを教室に送り届けると、自分の教室に向かう。この瞬間にも例の気配はハヤテをつけて来ている。ヒナギクと一緒にいたために警戒しているのだろうか。もしかしたら、彼女の教室での『お付き合いしてます宣言』を聞いたのかもしれない。
（さぁて、どうするかなー）
ハヤテは足取りも軽く教室の中に消えていった。

「おはようございます、ヒナギクさん」
「お……はよう、ハヤテくん」
翌朝、ハヤテは桂家の前でヒナギクを待っていた。恋人同士恒例の『一緒に登校』というやつをするためだ。
ちなみにナギは、今日もゲーム三昧で部屋から出てこようとはしなかった。
だからハヤテは、今日も心おきなくヒナギクの恋人役に徹することができるというわけだ。
「今日もかわいいですね、ヒナギクさん」
ハヤテはヒナギクの頬にキスをするように、顔を近づけた。

「なっ、」
「そこにいますよ、例のストーカーくん」
ヒナギクにのみ聞こえるように小声で付け足すと、彼女は表情を引き締めた。
真面目なその態度に、ハヤテは苦笑する。
「じゃあ、行きましょうか？」
ハヤテが手を差し出すと、意図を察した彼女がそっと手を重ねてくる。もちろん、恋人つなぎだ。
その手はわずかに震えている。緊張しているのがまるわかりで、やはりハヤテは、かわいいなぁと思った。
たわいもない会話を続けながら、ヒナギクの教室の前で別れる。校舎内もずっと手を繋いだままでいたために生徒たちのどよめきは昨日の比ではなかったが、ハヤテはそんなことどこ吹く風で、ヒナギクの柔らかな感触を堪能していた。本音を言えばもっと長く繋いでいたかったけれど、仕方がない。
（さて、と）
ハヤテはひとつ溜息を吐くと、物陰の気配を探った。そこからは、ハヤテに対して敵意剥き出しのオーラが放たれている。
（やれやれ、僕も仕事するか）
ハヤテはそっと息を吸う。
そして、次の瞬間、彼はひとりの少年の肩をがっしと掴んでいた。
「うわぁっ！　あっ、あれっ、いつの間にっ!?」
肩を掴まれた少年は状況がいまいち理解できていない様子で、哀れなほど狼狽していた。
体格はハヤテとたいして変わらないくらいだが、全体としてオドオドした雰囲気があるせいで、頼もしさといった点では到底執事たちに敵いそうもない。ストーカー化してしまうのも、かわいそうだがある意味納得できる風体だ。
一瞬で彼のもとに移動したハヤテは冷静に分析すると、ニヤリと口端を上げた。いいことを思いついた。
幸いここは死角になっていて、他の生徒たちから見咎められることはない。彼には一肌脱いでもらおうではないか。
「あなたがヒナギクさんのストーカーくんですね？」
「スト……!?　お、おまえには関係ないだろ！　ヒナさんに近づくなって言ったって、そうはいかな……」
うろたえるストーカーくんを遮って、いっそ恐ろしいほどの笑みを浮かべた執事は、彼の緊張しまくりの肩に手を置いた。
「やだなぁ、そんなこと言いませんよ」
「……へ？」
混乱して固まっているストーカーくんに、ハヤテはさらに笑みを深くして近づく。ストーカーくんも逃げようとしたのだが、残念なことに背後は壁である。結果、男に迫られるような格好になってしまっている。
「ただ、どこまであなたが耐えられるんでしょうね？」
「ど……ういう意味だよ」
ハヤテはにっこり笑ったまま、少年の顎に手を添える。
「見ていればわかりますよ。では、せいぜいがんばってください」
それだけ言うと、ハヤテは現われたときと同じように、一瞬で姿を消した。
その場には、取り残されたストーカーくんがひとり茫然と佇んでいた。

そして一限終了の休憩時間に、チャンスはさっそく巡ってきたのだった。
(おっと、鴨がネギを背負って……って、違うか)
どうでもいいツッコミを心の中で入れると、ハヤテは立ち止って鴨が自ら近づいてくるのを待った。
その鴨……もといヒナギクは、廊下の反対側から、なぜか大量の冊子を抱えて歩いて来ている。
彼女もハヤテの存在に気づいたらしく、ふと足を止めた。
「ヒナギクさん、どうしたんですか、ソレ?」
間近で見ると、何十冊もの問題集だと知れたから、おおよそ予想はつくけれど。
彼女が両腕に抱える荷物は見るからに重そうで、はっきり言って女の子が持つ量じゃない。
「ああ、コレ? 主にクラスの提出物よ。今日は私、日直だから」
今すぐに職員室に届けなくちゃいけないのよ、とヒナギクは苦笑する。
(まったくこの人は……)
ハヤテは内心溜息を吐く。お人好しにも程がある。
そしてふと、ハヤテは何度言っても無自覚な彼女に悪戯してみたくなった。
「そんなの一人で大変じゃないですか。お手伝いしますね」
そう言いながらさりげなくヒナギクに近づくと、荷物を受け取る瞬間、彼は彼女の頬に唇を触れさせた。つまりキス。
「えっ!?」
一瞬、彼女は何をされたか理解できていないようだったが、空いた手を頬に遣ったかと思うと、見る間に茹でダコになった。頭から湯気が立ち昇っているような幻さえ見えてしまう。

「……な、……な、なによもうっ!」
照れてハヤテをポカポカと殴るヒナギクに彼は「そんなに照れなくてもいいじゃないですか、本当にかわいいなぁ」と言っては、さらにヒナギクを照れさせた。
なんだかもう、勝手にしてくれと言いたくなるくらいのバカップルぶりである。もちろん、ヒナギクに自覚はない。
その渦中のお花畑の二人は放っておくとして、可哀そうなのは、そんなラブコメを運悪く目撃してしまった、一般の善良な生徒たちだ。いまだにショックから立ち直れずに硬直している者もいる。明らかに灰になっている者までいる。
そしてもっと可哀そうなのは、物陰で一部始終をしっかり目撃してしまったストーカーくんだろう。
衝撃はとてつもなく大きかっただろうに、健気にも目にいっぱい涙を溜めて、唇を噛み締めたまま必死に堪えている。
ショックすぎていつものようにハヤテを睨む余裕すらないようだが。
(おや、意外とがんばりますね。でもまだまだですよ。次も耐えられますか?)
ハヤテは鼻歌すら歌いながら、いまだに真っ赤な顔をしたヒナギクと肩を並べて廊下を歩いて行った。

(……というか、これは思っていたより急展開かも)
笑顔を張りつかせたまま、なぜかハヤテはヒナギクに迫られていた。
「ねえ、ハヤテくん、聞いてる?」
ヒナギクは器用にも、小声で問い詰める、なんて技を披露し

て彼の鼻先に指を突き立てた。
小声なのはもちろんストーカーくん対策。
そして一般生徒対策としてハヤテがヒナギクに引っ張って来られたのは、見事に人のいない森の奥。雰囲気作りのためか、明らかに使われた形跡のない小屋まで建っている。一見すると、あれだ、三匹の子豚の次男坊が作った木の小屋。つまりボロい。こんなものをわざわざ建てるなんて気がしれないが、まぁ、金持ちの道楽など一般庶民のハヤテの知るところではない。
「えーと、大胆ですね、ヒナギクさん。こんなところに僕を連れ込むなんて」
「へっ？」
ハヤテはわざとストーカーくんにも聞こえるように、大きめの声で言う。会話は噛み合っていないが、これで問題ない。ヒナギクにその気があるのだと含ませるのが目的なのだから。
対してヒナギクは小声のままだ。
「なっ何言ってるのよ!? 私はただ、いくらストーカーくん対策だからって、廊下であれはやりすぎだって……」
ハヤテの意図はどうやら彼女には伝わっていないらしい。
聡明な生徒会長にしては珍しいことだが、それだけあの公衆の面前でのキスが不満だったのだろう。
恥ずかしがり屋の彼女のことだから、その反応は予想通り。
けれど断行しただけの効果があったのだと、こっそり彼女に告げれば、おもしろいほど素直な反応を返してくれた。
「ホント……に？」
無防備な眼差しで見上げてくるヒナギクに、ハヤテはにっこりと笑いかける。鈍感な彼女は気づいていないが、ハヤテの瞳の奥は、怪しい光に輝いている。
「はい、もう一息、といったところですね。ですから、ここで仕上げをしてしまいましょう」
「えっ？ 仕上げって……んんぅっ！」
ハヤテはヒナギクを抱き寄せると、彼女の後頭部に手を添えて、覆いかぶさるようにして口吻けた。
驚いたヒナギクが抵抗するが、抱きしめる腕に力を入れて押さえる。日々鍛えている彼にとって、女の子の抵抗など、妨げになどなりはしない。むしろ抗われるほど征服欲が増すばかりだ。
息継ぎのうまくできない彼女が少しぐったりしてくると、ハヤテは少しだけ唇を離して囁いた。
「ほら、僕は『彼氏』なんですよ？ ここで嫌がったらバレてしまいます。今までの苦労を無駄にしたくないでしょう？」
「だからって……んっ……！」
再び口が塞がれる。
ヒナギクはハヤテにしがみつくようにして、膝が崩れそうになるのを堪えていた。
こんなハヤテは知らない。
強引で抵抗さえも許されない。
手を繋いだだけであんなにドキドキしていたのに、こんなキスをしていたら心臓が壊れてしまうんじゃないかと思う。
けれど、この程度で手を緩めるハヤテではなかった。
「んーっ」
彼の熱くぬめる舌が、頑なに閉じられた彼女の歯列を割り、うぶな口腔内を蹂躙し始めた。怯えて逃げるヒナギクの舌を捉えると、絡ませて吸う。
「……ん……ふぅ……！」
彼女から、媚びるような甘い声が抜ける。彼女は自分でその声を聞いて、さらに頬を火照らせた。その声はいかにも『女』

のもので、自分じゃないみたいだ。
ハヤテはからかうように、口吻けを深くした。次々に送られる大量の唾液を飲み下せずに、ヒナギクの顎に銀糸が伝う。
それでも彼女はひたすらハヤテの強引なキスを受け入れていた。
唇に触れるやわらかな感触が気持よくて、離したくないと思ってしまう。
どれほどそうしていただろうか。
それほど長い時間ではなかったはずだが、不得手のヒナギクの頭にはぼーっと靄がかかったようになり、何も考えられなくなっていった。あの気持のよい感覚に、意識が麻痺してしまったのかもしれない。
いつのまにかヒナギクは、ハヤテにしがみついていた手を離し、縋るようにして自らもっと深いキスをねだっていた。
「んっ、……ふぁ、ぁ、ハヤテ……くぅ……んん」
そのとき、派手にざざっと人が転ぶような音がして、次いでバタバタと足音が遠ざかっていくのが聞こえた。
はっと正気に戻ったヒナギクは、弾かれたように自分から押し付けていた唇を離した。
「なっ、なんてこと、私っ」
今度こそヒナギクは肌全体を薔薇色に染めて俯いた。
流されたとはいえ、自分からあんなふうにねだるなんて！……しかも見られていたのに！
人体発火さながらのヒナギクの頭を、ハヤテがポンポンと撫でる。こちらはいたって冷静だ。むしろラッキーとか思っている。
「さすがはヒナギクさん。『名演技』でしたよ」
「……演技？」

ヒナギクは沸騰して溶けた脳みそを無理やり回転させる。聡明なはずの彼女の頭脳は、いつもの何十倍もの回り道をして、やっと彼の言葉を理解するに至った。
「そっそうよ、さっきのはあくまで演技なんだから！　勘違いしないでよ!?　自分から……その、キス……したのだって、ぜんぶ演技なんだからねっ！」
「はい、わかってますよ」
言いながら、ハヤテは全身を火照らせているヒナギクを腕の中に閉じ込めて、ぎゅっと抱き締めた。
「ちょっ……ハヤテくん？　もう、いいでしょ？」
ストーカーくんの撃退には成功したんだから、と逃れようとする彼女を押さえて、耳朶に直接声を吹き込む。
「なに言ってるんですか、ヒナギクさん。彼がもう戻ってこないなんて保証はないでしょう？　ちゃんと恋人同士らしく振舞わなくてはいけませんよ。ここでバレたらきっと、逆効果です」
「でも、だからって……あっ！」
聞き分けの悪いヒナギクの耳の穴に舌を差し入れると、彼女の肩がビクリと跳ねた。
「やっ……ハヤテく……」
予想通りの反応に、口端を吊り上げる。
「感じやすいんですね、ヒナギクさん」
「そんなことない……っ！」
強がるヒナギクをかわいいと思うと同時に、頑なな態度を崩して服従させたい衝動に駆られる。
ハヤテは耳を舐めまわしていた舌を火照った首筋に移動させた。
「……もう、っ……いい加減に……っ」
ヒナギクの身体が小刻みに震えている。ハヤテの行為に感じ

ているのは明らかだ。それなのに、まだ陥落しようとはしない。そんな意地を張った態度に、ハヤテの背筋が興奮で痺れる。

「……あっ！　……や、……ぁ……あ……っ」

首筋を強めに吸えば、彼女はビクビクと過敏に反応する。舌を這わせながら移動して、細い首筋にいくつも紅い花を散らした。

「どうしたんですか？　『演技』がおろそかになっているようですが」

「だって、演技なんてもう、必要な……ひぁあんっ！」

彼女の身体が硬直する。

ハヤテはめくりあげた制服のスカートの中、下着越しに指で秘裂をなぞった。やわらかい肉の弾力に誘われて、指の動きがしだいに激しくなる。

「やっ、だめっ、ハヤテく……ん」

「どうしてダメなんですか？　……恥ずかしい場所をいやらしく濡らしてしまっているのがバレてしまうからですか？」

「――っ」

ハヤテは揶揄すると、下着の端から指を突き入れた。

「……ひっ！」

ヒナギクの太腿が緊張して強張っている。

「や……抜い……て」

「どうしてです？　こんなに気持ちよさそうなのに」

彼女の中で指を動かせば、濡れた水音が静まりかえった森に響いた。

ヒナギクは今にも泣き出しそうな顔で、必死に耐えている。

「ねぇヒナギクさん。我慢しないで。僕は優しい『彼氏』ですから、いっぱい気持よくしてあげます」

甘く囁くと同時に、指を3本に増やして彼女の解れかけた膣を激しく攻め立てた。

「ひぃ、ぁ、あぁぁぁあんっ！」

力を失った膝が崩れ、彼女は草の上に座り込んだ。好機とばかりに、ハヤテはそのままヒナギクを押し倒す。

「や……こんな、ところで……っ」

すぐ隣には粗末な小屋があるが、その中にでも入らない限り外からは丸見えだし、声だって聞こえてしまうだろう。

「なに言ってるんですか？　外から見えないと意味ないでしょう？　大丈夫ですよ、ここはずいぶん深い森ですから、明確な目的でもない限り、人なんか寄ってきません」

「でもっ」

「……黙って」

ハヤテはヒナギクの口を塞ぐと、ショーツに手をかけて、引き抜いた。とたんに、甘い雌の匂いが立ち込める。

「……ヒナギクさん、演技でもなんでもいいから、僕に合わせて」

「そん……」

「ヒナギクさん」

再びキスで言葉を奪う。

その間に、ハヤテはベルトのバックルを外し、充血し屹立する雄を取り出した。彼女の両脚を肩に担ぐようにして、中心の蕾に切っ先をあてがう。

逃げようとする腰を掴んで、そのまま腰を進めた。抵抗する肉に抗って力任せに凶悪な先端を埋め込む。肉を押し退ける感覚が敏感な皮膚を通して伝わってくる。やっとくびれまでを埋め込んだばかりなのに、かなりの圧力がハヤテを締め上げている。

「ヒナギクさん……力、抜いてください」

ヒナギクは激しく左右に首を振った。
「む……りぃ……！」
「しかたありませんね」
ハヤテはブラジャーごとヒナギクの胸を掴んだ。仰向けになっているせいで、ただでさえ小振りな胸は十分な肉をたたえてはいなかったが、布越しでも固く充血した乳首がわかった。
勃起した乳首を押しつぶし、擦るように弄る。
敏感な彼女はそれだけで嬌声を上げ、蜜を溢れさせた。
新たな潤滑剤の助けを得て、ハヤテはなんとか最奥まで自らの欲望を埋め込んだ。
膨れ上がった男のモノを呑み込まされたヒナギクは本当に苦しそうで胸が痛んだが、ハヤテは彼女の頬を撫でると、腰を突き上げ始めた。蜜が掻き回され、水音が響く。
「あっ！　あっ、やぁっ……！」
ヒナギクの白い喉が仰け反る。弱弱しくすがり付いてきた手を首に回させると、ハヤテはさらに勢いをつけて彼女の中に侵入した。
最奥の突き当たりをこじ開けるように何度も衝けば、そのたびに彼女は身体を硬直させて腰を跳ねさせた。
掻き回されて泡立った体液が互いの肌を汚していく。
「ヒナギクさん……いいですよ。誰かに見られるかもしれないと思うと、よけいに感じてしまうでしょう？」
「……んなこと、な……っ、あぁっ！」
突いていた動きを止めて腰を揺すると、さっきとは違う場所に当たるのか、ヒナギクは眉根を寄せて胎内のハヤテを締め付けた。あまりの圧迫感に、ハヤテの息が詰まる。
「……っ！　……ヒナギクさん、ここがイイんですか？」
ヒナギクが過敏に反応する箇所を集中的に攻め立てれば、彼女は余裕のない嬌声を上げて、激しく首を振った。
さんざん擦られて熟れた媚肉がハヤテに絡み付いて、気持ち良さそうにヒクヒク痙攣している。
「身体は素直ですね。でも、いつもの意地っ張りなヒナギクさんも好きですよ」
「……ぁ……は、やてく……」
ヒナギクの目を濡らしていた涙を拭ってやると、唇に触れるだけのキスをする。
『好きですよ』
ハヤテは愛しげに目を細めると、再び激しい突き上げを始めた。すでにドロドロに溶かされている蜜壺から、また新たに滴が溢れる。
『好きですよ。僕のかわいい彼女さん』
甘く囁くと、彼は何かに取り憑かれたように一心に激しく攻め立てた。切っ先が彼女の胎内を暴れまわり、犯し尽くす。
「ひっ！　あっ！　やぁぁっ、んっ！」
彼女の膣がきゅうっと絞まり、張りつめたハヤテの性器をさらに煽った。
ハヤテの背筋を甘い痺れが駆け抜ける。
熱が急速に下半身に集まり、彼は余裕のない表情で叩きつけるようにして、ひたすら欲望を捩じ込んだ。
意識が混濁する。
彼は最後の瞬間、本能的にヒナギクの最奥を刺し貫いた。
大量の精が放たれる。
「――くっ」
「ひぅっ、あっ、あぁぁぁぁあ……んっ！」
ヒナギクは背を弓なりに反らすと、秘部から二人分の白濁液を溢れさせて、ぐったりと力を失った。

「もうっ！　信じらんないっ！」
数十分後、小屋の中で目を覚ましたヒナギクは、起き上がるなり目の前の男を睨んだ。
一応処理してくれたのか、下半身のべたつきはなかったが、腰の痛みは涙が出るほどだ。ズキズキする痛みを我慢してハヤテに食ってかかる。
「いくら彼氏のフリって言ったって、最後まで……っ。しかも外でなんて！」
「でも、気持ちよかったでしょう？」
ハヤテが笑顔で問うと、怒り心頭のヒナギクに睨まれた。
「もう金輪際外でするの禁止！　ってゆうか、えっち禁止！」
ヒナギクがハヤテの鼻先に、びしいっ！　と指を突き立てている。ハヤテが口端を吊り上げる。
「へぇ、ヒナギクさんはそれでいい……」
「それとっ！」
彼女はさらに頬を染めて一瞬唇を噛みしめた。その仕草が妙にかわいい。
ハヤテがおとなしく拝聴の態度を取っていると、真っ赤な目で睨まれる。
「ぱんつ返しなさいっ！」
催促の手が差し出された。
「あ、バレました？」
ハヤテは悪びれずに言うと、上着の内ポケットからきれいに畳まれた女性ものの下着を取り出した。
「バレないわけないでしょう!?」
戦利品はあっさり奪い取られて、ハヤテは寂しげに手をにぎにぎした。
「記念にいただいておこうと思ったんですけどね」
捨てられた仔犬のような目でしょんぼりして言っても、今のヒナギクには効果はなかった。
「はぁっ？　いったいいくつめよ!?　ハヤテくんにあげるために穿いてるんじゃないんだからね！」
怒っているヒナギクさんもかわいいなぁ、と心の中で思いながら、表面上はとりあえず神妙にしているハヤテだった。
それで、例のストーカーくんだが。
ハヤテの策は効果てき面だったようで、あれ以来ヒナギクの前に姿を現すことはなかった。
風の噂に、部屋に引きこもっているとも聞いたが、そんなことハヤテの知ったことじゃない。ハヤテのヒナギクに付きまとったのが悪いのだ。
「今日も平和だなぁ」
ハヤテは伸びをひとつすると、早朝のメインストリートを鼻歌混じりに歩いて行った。

――終わり――

「大丈夫っ！かもしれない！」
２００８年7月6日発行

◇本文の処理がグレーからトーンに変わった瞬間です。
ちょうど一年前なのですねぇ・・・。

◇イベントに間に合わなかったので
コピー先行版が出ています。
そのときの表紙ですが・・・
突貫作業ですな・・・。